古屋祐子編
株式会社奉文堂発行
「英語のバカヤロー　『英語の壁に』挑んだ 12 人の日本人」

新聞の書評か配信メールの書評かを読んでいくらかでも英語に関係したことのあるヒゲ・じーちゃんは興味を覚え購入した。

12 人に関する英語との付き合い方を読んで感じたことは、普通の英語好きはここに書かれている内容にごまかされてはいけないと言うことだった。英語習得に非常に苦しめられた経験談は理解できないでもないが、これらの人の中で途中で英語習得を諦めたと言っている人が、その習得を諦めた段階の英語力がどの位のものだったのかを想像しなければならない。凡人からすればめちゃくちゃな英語習得のための努力をみなさんやられている。当たり前の英語好きがいくら逆立ちしても遙かに及ばぬ実力の持ち主であることを肝に銘じて読まなければならない本である。アメリカに数年滞在して”マクドナルド・イングリッシュ”がある程度難なくしゃべられる人が、これら 12 人より英語能力で勝っていると思い込んだら、とんでもない誤解である。

学会における英語での説明にはある程度の苦労をされたことは想像できるが、英語で書かれた論文については、一応大学の英文科を卒業した人とは比べものにならない英語力を身につけられた方々ばかりとお見受けする。

こういう前置きをして、読んでいて特にヒゲ・じーちゃんが面白いと思った事を紹介しよう。

養老孟司の編　－　「卒中などを起こして脳の一部が壊れると、文字が読めなくなる「読字障害」に陥ることがあります。英語圏の人はまったく文字が読めなくなりますが、日本人の場合、カナが読めない人と、漢字が読めない人の２通りに分かれます。なぜなら、日本人の脳の中で「カナを読む部位」と「漢字を読む部位」が別々だからです。」本当に日本人の脳は複雑ですね。西欧人には騒音としか聞こえない”小川のせせらぎ”が風情に富んだ音に聞こえたり。

養老教授が書いた論文を点検したネイティブの専門家が「これはネイティブが書いたのだろう」とか「本人が自分で書いてないだろう」という評をもらっていることを読み落としてはいけない。この本のタイトルにしたという養老先生の”英語のバカヤロー”を鵜呑みにしてはいけません。

淺野史郎　－　専門分野の英語は 8 割理解できるのだが、ヒアリングできないことに不安を覚えたという。書いたレポートをネイティブの英語の先生に見せたら「なんでこんな立派な英語が書けるんだ？むしろアメリカの学生よりもちゃんとした英語を書く」と言われたそうである。いくら勉強してもこれだけのレベルにたどり着けるもではない。本人はそうは言わないかも知れないが、血のにじむような努力をしたのではないかと察せられる。

明石康さん　－　中学・高校で英語の基礎をみっちりやっていれば、アメリカでの英語の実力は本物になると言われる。

松沢哲郎さん　－　学校英語はダメだという人はたぶん学校できちんと勉強していなかったのではないかと指摘されている。

明石さんと松沢さんの意見で思い出すのが、先月本の紹介ページで取り上げた株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン発行、越前敏弥著、「越前敏弥の日本人なら必ず誤訳する英文」の中で著者は、

「翻訳学校で教えていて、ひとつ感じることがあります。合格したかどうかはともかく、かつて大学受験などの大きな試験に向けて本格的に勉強した人とそうでない人とのあいだには、翻訳学校にかよいはじめたあとでもやっぱり明確な差が表れてくるんです。」と言っている。

ヒゲ・じーちゃんもこれと同じような思いをしたことがある。ヒゲ・じーちゃんは輸出専門商社に勤めていたことがある。アメリカ市場担当者は交代でアメリカにある合弁会社に駐在して仕事をしていた。担当者には英文科を卒業した者とその他の学部を卒業した者がいた。英文科以外の学部を卒業した者は、帰国すると 2，3 年で英語の話す能力も、読み書き能力もがくんと落ちてしまうのだが、英文科卒業の者は読み書きの能力は向上した状態を維持していたようだ。

ただ英語を話す発音は、中学高校時代に英語が好きで英語を勉強し大学の英文科に進んだ者は、発音のお粗末な英語教師から英語を学ぶケースが多いため、その時に覚えた下手な発音が習い癖になって長い間アメリカに滞在しても下手な英語の発音から解放されることはないようだった。私の知る限り英語の発音ではアメリカ帰りの他の学部出身者に英文科出身者は負けっ放しであった。

また、この会社の私の上司は、英語を米軍基地で習得したためか、ヒアリングとスピーキングの発音は素晴らしい能力を発揮していたが、コレポンを読んだり書いたりするのは大の苦手で私が入社したら丸投げで私にすべて任せてしまった。

本川達夫さん　ー　英語に向かい合うのに、これ以上的確な表現はない。「すっきり、くっきり、これっきり」

ヒゲ・じーちゃんは、商社勤めの後 10 年間 M 重工業のサービス部マニュアルグループに属して翻訳、翻訳点検、議事録の準備・作成、通訳をしていた。このグループでたっぷり産業英語を経験した。その時感じたことは、高校と大学の英文科で産業英語（工業英語）を教える場所と機会を設けるべきだということだった。

その理由は、絶えず真剣に英語と向き合う、つまり誤訳をしてはいけないという考え方を徹底できるからである。航空機の取扱説明書やフライト・ハンドブック（パイロットが使う操縦マニュアル）で誤訳をしたら最悪どういう事態が生じるか想像できるだろう。そこへいくと文系の英語は理解したつもり程度のあやふやな訳をして誤訳をしても極端に言えば、何の支障も起きない場合が多い。

機械英語に"machine　tool"と言う言葉がある。これを英文学で著名な大学教授に翻訳をお願いしたところ、この英語に”機械用工具”というような意味合いの訳をしたらしい（ヒゲ・じーちゃんはその訳語を正確に覚えていないので）。機械に詳しい人なら、これが誤訳であることは直ぐ分かる。「工作機械」という日本語が当てられている言葉だ。この誤訳をおそるおそる指摘したら、この教授は烈火のごとくお怒りになったそうだが、この本のはじめから終わりまで"machine　tool"を”機械用工具”という訳語で通したら意味不明のまま終わるだろう。

最後に繰り返すが、ここに登場されている方の中には途中で英語の習得を止めたとか、英語のバカヤローとか言われているが、その方たちの英語の実力は、大学の英文科を卒業しただけの凡人の英語のレベルとは比べものにならないほど高いこと、英語習得で想像できないような努力をされているということを行間から読み取って欲しい。また、英語の習得に王道なし。地道に英文法を徹底的に理解し、応用できる能力を身につけること、そして話す内容の元となる常識、学識、知識を納めることが何よりも大切なことをこの本は教えてくれる。